

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	「注文の多い料理店」の最初の中国語訳者：知識人・陳緑妮について
Author(s)	母, 丹
Citation	近代文学試論, 58 : 17 - 28
Issue Date	2020-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/51593
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051593
Right	
Relation	



「注文の多い料理店」の最初の中国語訳者

— 知識人・陳緑妮について —

はじめに

宮沢賢治の代表作の一つである「注文の多い料理店」は、一九四〇年代から中国語に翻訳され、受容されはじめた。その最初の訳文は、田村俊子が創刊した華字婦人雑誌『女聲』第二卷第八期（一九四三年十二月）掲載の「定件繁多的館子」であり、中国での宮沢賢治受容において非常に重要な事項である。また、この訳文は『女聲』に掲載された日本の文学作品の嚆矢¹でもあり、拙稿「田村俊子という雑誌編集長―『女聲』掲載・宮沢賢治「注文の多い料理店」の役割―²」で考察したように、戦争宣伝へ反抗を示す役割を担わされたため、『女聲』の編集長田村俊子も重要視していたと考えられる。ただし、これほど重要な訳文の翻訳を担当したのは、一九二四年生まれで、当時十九歳に過ぎなかった陳緑妮という女性である。なぜこの若い女性が訳者として田村俊子に選ばれたのか。答えを簡単に言えば、それは陳緑妮が訳者として非常に優れているからである。しかし、この優秀な訳者は、歴史上ではほぼ忘れられている人物となってしまうている。本稿ではまず家庭・訳文・戦後の人生といった角度から、「優秀な訳者」という一言では括れない彼女の存在に光を当てる。

母 丹

また、陳緑妮は歴史上ではほぼ忘れられてしまっているが、彼女と同じ家庭背景を持つ女性が武田泰淳のいくつかの小説において登場している。武田泰淳研究者は陳緑妮がそれらの女性のモデルだと主張しているが、両方は実は相当にかけ離れている。この点についても本稿で明らかにする。

一 陳緑妮とその家庭について

陳緑妮（一九二四～一九九五年）は、民国時代の有名な洋画家陳抱一と日本人女性飯塚鶴の娘として生まれた。父親の陳抱一（一八九三～一九四五年）は恵まれた家庭環境に育ち、日清戦争後、西洋美術を学ぶために日本に渡った。そこで飯塚鶴と出会い結婚し、卒業後は上海に戻った。上海において陳抱一は多くの個展を開いたり、上海芸術専科師範学校をはじめとする芸術系学校で西洋美術を教えたり、西洋絵画の普及のための著書や文章を発表したりして、上海の西洋画運動の中心的存在として活躍した。また、陳抱一は上海江湾に広大な邸宅——陳家花園³を擁し、一九二二年にその敷地内に抱一画室を建てた。一九二四年に生まれた陳緑妮の物心がつき始めた頃には、陳家花園は日中の多くの美

術関係者や文化人が集う芸術サロンとして活況を呈していた(図1参照)。陳家がそれらの美術関係者や文化人と交際を持っていたのは、陳抱一の日本留学経験によるのも大きかったが、それ以外に、陳抱一が教鞭をとっている上海芸術専科師範学校の近くにある「内山書店」も、戦前は中日の文化サロンとして非常に重要な役割を果たしていた。内山書店を通じて陳抱一は美術関係者のみならず、谷崎潤一郎や金子光晴・森三千代夫妻を含む日本の文学者たちとも親しく交友していたのである。



図1 抱一画室で撮った写真。中央の幼女が陳緑妮、その背後の男性が陳抱一、隣のふくよかな女性が飯塚鶴。

飯塚鶴については、陳緑妮の回想に依るしかないが、ここでは母親が「文学好きで、創作するのが好きである。いつも詩や俳句を作ってい

て、その上手さはよく有名な日本の文学者に褒められていた」(傍線は稿者、以下同)という鶴の姿が語られている。こうした情報を統合してみると、陳緑妮の家庭は、中国語と日本語のバイリンガルの環境であるのみならず、日本文学の素養のある家庭でもあったと判断できる。そのような背景を持つ陳緑妮が日本文学の翻訳の適任者たる才能を持ち合わせていたであろうことは予想できる事態であり、彼女の存在は後に田村俊子の目に留まることになる。

陳緑妮と田村俊子が出会うに至った背景には、陳家が戦時下に直面した苦難が関係している。陳家の生活は本来裕福で幸せだったが、一九三二年の第一次上海事変の折に、陳家花園が日本軍の砲火の犠牲となつて灰塵に帰したことに伴い、その生活も破壊された。第二次上海事変や日中戦争勃発後、陳家は「孤島」となった上海で戦火を浴びながら、親類の家で仮住まいせねばならなくなり、苦しい生活を送っていた。しかも、家主である陳抱一にとつて、その苦難の生活はより複雑な一面があった。

Fu, Poshek は戦時下上海の知識人たちの苦しい立場について、彼らは「生存や家族への配慮、自己の利益の追求といった私的要求と、愛国心と尊厳という公衆道徳との板挟み状態に陥っていた。また、極度の恐怖の下で、彼らは曖昧で「グレーゾーン」的な生き方をせざるを得ない。敵の前で生き延びるために、彼らの軟弱・言行不一致・妥協は避けられず、そのため心の中の尊厳や道徳的勇氣にも苦しめられる」と述べており、知識人たちはこうした重圧をかけられたことがわかる。

知識人陳抱一は戦前日本側と濃厚な接触があり、また何よりも日本人の妻を持つため、個人生存と公衆道徳との間のみならず、中国人社会

と日本人社会との間にも挟まれ、二重の重圧をかけられていた。戦時下に彼と接触したところのある美術関係者・清野比佐美の回想のなかには、陳の内心の葛藤が端的に表れている。清野によると、「日本との有効な媒介者」であった陳抱一は事变後フランス租界内の中国人住区にある親類の家の二階に隠れ住み、外部からみれば「一切消息を絶った」存在となつたが、日本で絵画を学んだ画家の本能ともいべきか、やはり日本の絵が見たいので、上海画廊¹⁵へやってきて、そこで清野と知り合い、その後人目を避けて二回面会したことがあるという。陳抱一は清野に向かつて「辛亥革命から休むことなくつづく激動、中国現代史の渦まく表舞台上海での特殊な境遇にいて、いつも被害者の立場に立たなければならなかつたその時々の痛苦受難、目前の残酷な光景からの避難の連続の今日までを、夫妻こもこも、次第に怒りに震えたり泣泣して尽きるところなく語つた」のである。人目を避けていたのは、中国人居住区に隠れ住む陳抱一が日本人との交際を知られることを恐れていたためであつたという。陳抱一とその家族はこうして、二重の圧迫を受けざるを得なかつたのである。

陳緑妮によると、父親は「日本軍の残酷な侵略や中国の官僚軍閥の腐敗無能を憎み、憤懣し、苦しめられている同胞に対しては愛と同情を感じていたが、解決する道が見つからず、すこく苦悶し彷徨つていた」という。そして「家に閉じこもり、巨大な傷を心の底に埋めて、静かに春が訪れるのを待つていた。病氣や貧困のため世を去るまで、外部と接触せず、自分の小さな天地に閉じこもつていた」¹⁷。ただし、清野によると、租界が日本軍に占領される前、陳抱一は「一切消息を絶つた」存在であつたが、「太平洋戦争となつてからは、いろいろな日本人が接触を計り、

ついに病弱な彼を引つ張り出すことが多く、終戦を待たず亡くなつた」¹⁸。ここで言う陳抱一を「引つ張り出す」「いろいろな日本人」とは、中日文化協会上海分会（以下「上海分会」と略す）関連の人々だと考えられる。陳抱一と上海分会との接触は日本側の強引なものであつたが、陳緑妮と田村俊子との接触をもたらししたのも、まさにその機会によるものであつた。次に、陳抱一と上海分会との接触の詳細について述べる。

二 陳抱一と中日文化協会上海分会

一九四〇年七月二十八日、つまり汪兆銘が「政權」を樹立した三ヵ月後、日本大使阿部信行大将を強力な後ろ盾として、日本文化を中国へ浸透させるための中心的役割が求められた日本の国策推進機関——「中日文化協会」が発足した¹⁹。その分会の一つである上海分会は、一九四一年一月二十九日に成立した。続いて一九四二年六月二十一日に、上海分会は「上海洋画学会」を設立し、その学会の常務理事に陳抱一が選ばれ、さらに一九四三年十月四日、上海分会の改組成立典禮にて、陳抱一はその理事にもなつていた²⁰。しかし、理事に引つ張り出された陳抱一の活動を見ると、彼は上海分会の望むような「日華美術の交流」という役割を積極的には果たさず、理事の仕事もまともに務めなかつた。これらの活動を全部取り上げる余裕はないが、彼の態度を最も端的に表す文章として、半ば不承不承書いた「美術情況片感」讀須田國太郎氏文後¹（同号掲載の須田國太郎「中日兩國的美術提攜」に対する感想）を紹介してみたい。この文章の中で陳抱一は「我が国の近代美術が日に

日に暗たんとしてくるのは、これまでの時局環境、社会の不安定に起因するという気がしてならない」と中国の美術発展を惨憺にした原因——時局環境（戦争）への不満を述べており、「中日美術の提携」を唱える須田國太郎に対して、「形式的に『美術交流』を唱えることができて、実際にはなお多くの困難があり、よい成果がなかなか収められないであろう」とやや皮肉めいた異議を唱えている。

もちろん、陳抱一の不満も皮肉も婉曲的に語られており、こうした婉曲さはまさに前節で取り上げた『F氏の述べ通り、「愛国の責任や尊厳」を守るうとしながらも、「ある程度の妥協」をせねばならない知識人陳抱一の「グレーゾーン」的な生き方と言える。

また、陳抱一の「グレーゾーン」的な態度は、彼自身の文章に現れているのみならず、上海分会の人々の眼にもそのように映った。会の常務理事兼参与林廣吉は「陳抱一の個展」という出来事をめぐって、以下の文章を残している。

陳抱一さんは漸く御輿をあげたさる二十日から二十五日までを會期として個展が開催されるがこの催しを待ち望んでゐたのは獨りお弟子さん達ばかりではない。ここに住む日本の畫家達は勿論の事、およそ陳抱一さんを知るほどの人はいつまでも黙りこくつてゐる陳さんの澄んだ眼をもどかしくさへ思つてゐたのだつた。その陳さんが愈よ個展を開く準備にとりかかれたと聞いたとき、日本のある畫家はカンパスを、ある畫家は額縁を陳さんのところへ持ち込みまたある人は會場をつくる骨折りを買つて出たりした。といふのは決して陳さんがそれ等の品に不自由されてゐるからとか、會場をつくる

手がないからといふのではなくて、その準備の途中で陳さんがまた黙りこくつてしまつてはやりきれないといふ心づかいからだつたと思ふ。陳さんはそれほど日本の畫家仲間から好かれ尊敬されてゐるのである。

陳抱一は上海分会及び「上海洋画学会」の理事になつたため、「日華美術の交流」への貢献として、個展を開催することを求められた。この個展開催をめぐる林廣吉の上記の文章から、次のような経過が見取れる。陳抱一は上海分会の人々に対して、常に頑なに沈黙していたため、陳抱一に個展を認めさせるためには、大変な労力を費やした。陳抱一はこうして、「忍耐」や「沈黙」を主とする態度で上海分会と接触し、やむを得ず協力する場合もあつたが、それは「グレーゾーン」的なものであり、決して積極的な協力ではなかつたのである。

陳抱一と上海分会との接触は「グレーゾーン」的なものだったが、頻度からみればかなり高かつたため、こうして娘陳緑妮の存在も次第に上海分会やその周辺の日本人たちに注目されるようになった。それらの人々の中には、「注文の多い料理店」最初の中国語訳の訳者として陳緑妮を選定した田村俊子も含まれる。

三 陳緑妮の実像

本節では、まず訳文本文にもどり、田村俊子に認められるほどの才能を持つ陳緑妮の実際の翻訳能力を見てみたい。訳文「定件繁多的館子」は原作に忠実に訳されており、同時代の訳文に多く見受けられる誤訳

も書き換えもほぼ無きに等しい。³⁰⁾ そのうえ、民国時代特有の文語口語混じりの文章で綴られており、翻訳くささもなく流暢であり、非常に優れた訳文だと評価できる。その優秀さを最も端的に表しているのは、両義語「注文」への処理である。

「注文」という単語は日本語において、①「品質・数量・形・寸法などを指定して、作らせたり届けさせたりすること」と、②「何かをさせる時に、特に条件をつけること」という二重の意味があるが、中国語の中にそれに対応する単語がないため、訳者が①か②の片方の意味を表す中国語単語を選ぶしかない。陳緑妮は「注文」に対応する訳語として、①に当たる「定件」を選択しており、「注文」の二重の意味が明かされた肝心な一文に対して、以下のように処理している。

原文…「沢山の注文といふのは、向うがこつちへ注文してるんだよ。」
訳文…「所謂定件繁多，恐怕原來就是他們要定我們的菜呀！」（「沢山の注文というのは、向うがこつちを料理として注文してるんだよ。」）

このように、②の意味合いは抜けているが、山猫の罨は料理店の名前からはじまっていることは伝えられた。陳緑妮以後の「注文の多い料理店」の中国語訳（一九八〇年以降）には、こうした処理のしかたが見られない。ほとんどの訳文は②の意味合いを取り、「要求」という訳語を使っているが、このように処理すると、①の意味合いが抜けているので、山猫の罨の巧妙さが十分伝わっていない。そのほか、二通りの解釈をうまく取り入れるため、中国語における多義語を使う訳文も少しあるが、こうすると料理店の名前及び作品の題名が完全に書き換えられ、「花様翻新的飯店」（「様式の新しい料理店」）または「花様百出的料

理店」（「バラエティ豊かな料理店」）のようなものが「注文の多い料理店」の代わりとなり、原作の味わいも少しではあるが変えられてしまった。こうしてみると、原作に忠実なうえで、山猫の罨の巧妙さをうまく伝えているのは陳緑妮訳のみである。この訳文が時代を超えて吟味されるに値する素晴らしさを持っていることから明らかなように、知識人家庭で生まれたバイリンガル陳緑妮は抜群な翻訳才能を持っていたのである。田村俊子は彼女のそうした才能を見抜いたため、「注文の多い料理店」という重要な掲載物の翻訳を彼女に託したのではないかと考えられる。

また、陳緑妮は翻訳の才能のみならず、洋画家陳抱一の娘だけあって、絵画の才能も持っている。彼女は「注文の多い料理店」を含めて七篇の童話（残りの六篇は『女聲』誌上の豊島與志雄童話「銀の笛と金の毛皮」「うどんど石」「太一の靴は世界一」「象のワンヤン」、『大陸画刊』³¹⁾における「猴膽」³²⁾と志賀直哉「菜の花と小娘」）を翻訳しており、「注文の多い料理店」と「菜の花と小娘」以外の挿絵は全部陳緑妮がや或未熟な手法で描いた童心あふれるものであり（図2、図3参照）、彼女の絵画才能も田村俊子や『大陸画刊』の編集者に認められていることがわかる。



図2:「銀の笛と金の毛皮」挿絵



図3:「象のワンヤン」挿絵

次は戦後の陳緑妮について見てみたい。終戦直前の一九四五年七月二十七日に、陳抱一は腹膜炎のため病没した。娘陳緑妮と妻飯塚鶴がそれぞれ一九四七年と一九四八年に上海を引き揚げ、日本に戻ってきた。陳緑妮は後に中日文化協会の権力者であった林廣吉の息子林得一と結

婚し、また父陳抱一の後を継いで東京美術学校で絵画を学んでいたが、一年ほどで病気のため退学した。その後の文芸関連の彼女の活動は確認できないが、日中友好活動家としての姿が目立つ。一九六四年、陳緑妮は中国に戻り、一九五二年に亡くなった母親の願望に従い、父親の遺作を北京に位置する中国美術館に寄贈した。後の文化大革命という動乱の時期においては、息子林道紀を中国へ留学させた。さらに一九七〇年代に日本で景德鎮飯店という中華料理店を経営しはじめ、一九八七年に父親を偲ぶ文章「懐念我的父親陳抱一」を書いた。³⁵⁾ 本論では「懐念我的父親陳抱一」の内容を大いに参照しているが、ここでは特に結末部における陳緑妮の平和への祈願を取り上げたい。「両親の国籍のために、私と家族は中国人としてだけでなく、日本人としても戦争の苦難を嘗めており、身を切るような苦しみを経験した」³⁶⁾ ため、陳緑妮は両国の平和と代々の友好を心より祈願する。そのために「自分の微力を尽くし、さらに自分の子孫にもそうした理念を伝える。それこそが父親に対する最も素敵な偲び方である」³⁷⁾ と述べており、彼女も実際にこのように行動したのである。同じく一九八七年に、彼女は夫林得一や息子林道紀と共にもう一度北京に戻り、「懐念我的父親陳抱一」を収録した『現代美術家陳抱一』の編者と図4のような記念写真を残したのである。上述の情報を統合すると、戦時下は多くの苦難に遭ったが、翻訳と絵画において頭角を現し、戦後は日中友好活動家として大いに活躍した陳緑妮という人物の実像が浮かび上がるのである。

本節では、陳緑妮のもう一つの「在り方」——武田泰淳の作品における「陳緑妮」に注目したい。戦時下において上海分会の下部組織「東方文化編訳館」³⁸の主任を務めていた武田泰淳は、戦後三篇の作品（「非革命者」「女の国籍」「上海の螢」）を書き、「中国の画家を父に、日本

四 武田泰淳の作品における「陳緑妮」



図4 林得一

陳緑妮

林道紀

人女性を母に持つ混血児の女性」（それぞれ「M喫茶店の彼女」「陸淑華」「林小姐」である）を登場させている。これらの「混血児の女性」は陳緑妮と同様な家庭背景を持つことを根拠に、陳緑妮をモデルとして描かれていると判断する泰淳研究者がいる。

たとえば郭偉は「武田泰淳『女の国籍』論」（『立命館言語文化研究』一八（三）、二〇〇七年二月）の中で、「泰淳は、「非革命者」と『上海の螢』においても、「女の国籍」の視点人物と同一の女性を描いている。実際、上海時代の勤め先である上海中日文化協会の関係者の中に、「彼女」らしき人物が実在していた」としたうえで、陸淑華の家庭関係（両親と夫）と陳緑妮のそれとの類似性を整理し、「以上の経緯から『女の国籍』の視点人物、「陸淑華」は、この陳緑妮モデルとしていると断言できる」と述べており、大橋毅彦「ほか」編著・注釈『上海 1941-1945』武田泰淳『上海の螢』注釈（双文社出版、二〇〇八年六月）の中にも、

「林小姐」が「日本人の女性と中国人の男性の間に生れた混血児」であることは、すでに「汗をかき壁」の章で紹介されていたが、父親の職業が「画家」であるとわかったことで、彼女の父のモデルは陳抱一（一八九三〜一九四五年）であり、「林小姐」のモデルは、陳抱一とその妻飯塚鶴（結婚後は陳范美と改名）の間に生まれた陳緑妮（一九二四〜一九九五年）であることがわかる。

という「林小姐」に関する注釈がある。しかし、二つの先行研究とも陳緑妮と「彼女」らの家庭関係における類似点のみに注目しており、両方の人物像における相違点を見落としている。以下にそれらの相違点を作品ごとに考察してみる。

「非革命者」における「M喫茶店の彼女」の人物像は、「わが身のほかなさに甘えているだけで、その底深いおそろしさに気づいてはいなかったのである」^⑧という一文のように、混血児という手痛い運命を背負うはかない存在として描かれている。確かに中国と日本の間に挟まれたため、陳緑妮本人も苦難を経験していたが、戦後の彼女の日中友好活動家の姿からすると、混血児という身分を「底深いおそろし」いものとするのは悲観的な見方にすぎると言わねばならない。

「女の国籍」は戦後の日本が舞台で、軍需機関の局長の息子（日本人）と結婚した混血児陸淑華の国籍に関する葛藤（「非革命者」における彼女の「混血児という手痛い運命」の拡大版とみてよい）がテーマである。「M喫茶店の彼女」と同様に、陸淑華のそうした葛藤も陳緑妮本人には見られず、二人を同一視することはできない。

また、作品の中で陸家の戦時下の苦難も度々思い出されており、その部分には陸淑華の人物設定が詳細に記されている。

私自身は父が考えているような、純真無垢の乙女ではありません。もっと世の中の駆け引きは承知した女です。私は父を救うため、まず金を稼ごうと決心しました。

父の隠れ家を探知されぬよう、私は両親と別居しました。私には、母が私にあてがおうとした就職より、もっと条件の良い勤め口を手に入れる自信がありました。中国女とも日本女ともつかぬ私の容姿、これが隣邦中年紳士の、同情と好奇心を惹くのは、既に実験済みです、可憐、清楚、触れば消えなん露の玉の風情。そんな外見を装う技巧は、女なら誰でも心得ています。父の反対を防ぐには、英語学習

に通うからと、口実を設けました。

軍需物質を買い漁る日本側の機関に、秘書として就職。仕事は無いも同然。中日二つの会話を使いわけて、電話を数本掛ければ、一日が終る。^⑩

さらに、秘書に就職した後、陸は局長に息子周作との交際を頼まれた。三人で新劇を見に行つたことがあり、そこで座席が足りず、局長は陸を膝に乗せたのである。陸と局長という「隣邦中年紳士」（隣邦中年紳士は局長一人に限らない）との関係は実に曖昧であり、さらにその間に局長の息子も取り入れられ、彼も陸に魅了される。陸がまるで「色」という若い女性の特徴を売り、乱れた異性関係を持つ女性のように設定され、陳緑妮の優秀な才能は一切見られない。陳緑妮と陸淑華とは、家庭背景こそ同様であるが、性格・才能・生き方といった面においては、完全に分かれていけると言える。

「上海の螢」における林小姐は協会の小田理事長の秘書を務めており、下記のように初登場したのである。

理事長は、少女のような秘書を連れて、相変わらず私に冗談をあげた。その可愛らしい女秘書がどんな種類の女性なのかも、私にはわからなかった。上海語も北京語も、その上、広東語にも通達している彼女は、日本人の女性と中国人の男性の間に生まれた混血児だった。

また世の中のことなどよく知らない、あどけない林小姐は、客が多くて椅子が足りなかつたりすると、平気で小田先生の膝の上に腰かけた。たりした。そんなとき、娘をあやす父親のような理事長は、少しも

好色漢のようにみえなかった。

彼の長男も、父に似て、眼もとに愛嬌のある女好きのする好男子だった。あまり勉強好きともみえぬ彼は、上海の聖ジョーンズ大学に通っていた。親父さんと同様に、あけつびろげでこだわりのない長男は、その特殊な大学で中国人学生にまじり、英語で講義をうけているのだった。その、おとなしい、のんびりした日本青年も、すつかり林小姐と親しくなっていて、おまけに若者らしく、ふざけ合ったりしているのだった。⁽⁴⁾

このように、林小姐の秘書という身分、林小姐・理事長・息子三人の関係といった設定は「女の国籍」のそれがそのまま受け継がれている。また、林小姐は「可愛らしい、あどけない」外見をしており、陸淑華のように「純真無垢の乙女」だと思われるかもしれないが、後の部分に「林小姐の両親の住む家」「理事長の秘書をしていなさるお嬢さんて、酒が強いよね」という記述もある。したがって、林小姐も陸淑華と同様に両親と別居しており、ほんとうは「世の中の駆け引きは承知した女」である可能性が高い。このように林と陸は、類似点がかなり多いが、性格・才能・生き方といった面において、二人ともモデルとされる陳緑妮本人と完全に分かれて離れている。

また、両親と別居し、秘書として就職しているという林と陸における共通点も、陳緑妮にはなかったと考えられる。回想「懐念的父親陳抱一」の中では、陳抱一が亡くなる前日、病院へ運ばれる途中で、「燃素（陳緑妮のこと）を行かせないでくれ。彼女は家で露露（陳緑妮の大好きな飼犬）の世話をすればいい……」⁽⁴⁾ともがきながら妻に伝えたの

である。これによると、陳緑妮はやはり両親や飼犬とともに家で暮らしていたことがわかる。さらに、危篤の時でさえ愛娘を汚く混乱している病院に行かせなかったり、飼犬を愛娘に付き添わせたりする陳抱一の姿からすれば、陳緑妮は両親に掌中の珠のように大切にされていたことが読み取れ、そのような彼女が混乱した上海で秘書のような仕事に就く可能性はほぼゼロに等しい。それは陳緑妮と林・陸とのもう一つの大きな相違点である。

要するに、武田泰淳の作品における「混血児の女性」は、家庭背景を除けば、ほぼ陳緑妮本人とは真逆な人物となっているにもかかわらず、泰淳研究者たちはまさに家庭背景の類似性のみを根拠に、「混血児の女性たちは陳緑妮をモデルとして描かれている」と判断している。こうした厳密さに欠ける「モデル説」が通説となれば、陳緑妮は大いに誤解されることになってしまう。無論、家庭背景の類似性が事実であり、「モデル説」は間違いではないが、両方の人物像における相違について、慎重な説明を加えたほうが妥当だと考えられる。

おわりに

一九四三年という戦争の最中に、陳緑妮という抜群の翻訳才能を持つバイリンガルが「定件繁多的館子」という優秀な「注文の多い料理店」の訳文を残した。しかし、この訳文が生まれてから四〇年近くもの長い間、中国の動乱はほぼ休むことなく続いた。そのため、およそ四〇年後の新しい訳者たちはこの優秀な訳文を受け継ぐことなく、それぞれ自分なりの方法で新しい訳文を作り出していく。特に「注文」に対する訳

語としては、「要求」という単語が次第に定着し、現在中国の多くの読者は、山猫の巧みな罠を意識していないと考えられ、それが現時点「注文の多い料理店」の中国受容における大きな問題点となっている。ただし幸いなことに、現在訳文「定件繁多的館子」は雑誌『女聲』とともに発掘され、今後、研究者だけでなく、新しい訳者たちにも参照される可能性がある。その過去の優秀な手本を参考にし、より完璧な訳文が作り出されていくことも期待できよう。

注

- (1) ほかに掲載された日本文学作品は、豊島與志雄の童話四篇（「銀の笛と金の毛皮」「うどんど石」「太一の靴は世界一」「象のワンヤン」）、武者小路実篤「愛と死」、火野葦平「怪談宋公館」である。
- (2) 「田村俊子という雑誌編集長―『女聲』掲載・宮沢賢治「注文の多い料理店」をめぐる一」（『国文学』二四六号、二〇二〇年六月）
- (3) 陳抱一の父親は招商局の洋務官僚で、母親は香港有数の資産家の娘であった。
- (4) そのほかにも、神州女子学校美術科、上海大学美術系、上海芸術大学、立達学園美術科、新華芸術専科学校などがある。
- (5) 陳抱一と陳緑妮の基本情報は、陳瑞林編『現代美術家陳抱一』（人民美術出版社、一九八九年九月）、大橋毅彦・山崎真紀子・木田隆文・松本陽子・竹松良明・趙夢雲『上海 1944-1945：武田泰淳『上海の螢』注釈』（双文社出版、二〇〇八年七月）などを参照しまとめたものである。
- (6) <https://www.jianshu.com/p/77427a3ee84>（最終閲覧日二〇二〇年九月二十九日）による（「简书」における文章「陳抱一作品欣賞」）。
- (7) 一九二〇年代後半から一九四五年まで、内山完造夫妻によって経営される書店である。戦前は中日の文化サロンとして活況を呈していたが、戦争勃発後、書店は開業してはいたものの、客足はほとんど途絶えてしまった（太田尚樹『伝説の日中文化サロン 上海・内山書店』（平凡社新書、二〇〇八年九月）による）。

- (8) 谷崎潤一郎「上海交遊記」（『女性』一九二六年五、六、八月号）による。
- (9) 金子光晴「上海より」（『日本詩人』一九二六年八月号）と宮内淳子「森三千代の上海——描かれた装いの意味」（『アジア遊学』第一六七号、二〇一三年八月）によると、陳抱一と金子光晴夫妻との交際はかなり濃厚なもので、森三千代は陳抱一夫妻の生活をモデルに小説「女の火」「火あそび」を創作したという。

- (10) 陳緑妮「懐念我的父親陳抱一」（陳瑞林編『現代美術家陳抱一』、人民美術出版社、一九八九年九月）
原文：母親……爱好文学，总喜欢写点什么，爱作诗，俳句写得相当好，曾受到一些有名的日本文学家的赞扬。

- (11) 一九三七年十二月、上海は日本軍に占領された。ただし、共同租界とフランス租界は一九四一年十二月の太平洋戦争勃発まで占領されなかったため、「孤島」と呼ばれていた。

- (12) 本名は傅葆石である。一九五五年香港に生まれ、後スタンフォード大学にて歴史学博士号を取得した。現在はアメリカの国籍を持っている。

- (13) Fu, Poshuk 『Passivity, Resistance, and Collaboration: Intellectual Choices in Occupied Shanghai, 1937-1945』 (Stanford University Press, 一九九三年十一月) を参照しまとめたものである。原文において関連の文章は以下の通りである。

During the eight years of Occupation, intellectuals in Shanghai found themselves confronted by the dilemma of the conflicting demands of private and public morality : on the one hand, survival, concern of one's family, and pursuit of one's own interests; on the other, patriotic commitment and dignity. (omission)

Ambiguous response was only natural in an extreme situation of dehumanizing terror, which Primo Levi aptly calls the 'grey zone' of existence : a situation in which weaknesses, inevitable inconsistency of behavior, and even a degree of compromise, as well as dignity and moral courage, were involved for anyone trying to survive in the face of the enemy.

- (14) Fu 氏は注 (13) の著書の中で、主に作家を例として説明しているが、その苦しい境地は上海に留まった知識人全員に共通すると考える。

- (15) 一九四〇年四月、南京路二二二号の喫茶店トリコロール階上で開業した

画廊である。

- (16) 清野比佐美「私的絵画の裏面史」完「前幕のおわり」(『みづゑ』
九一五号、一九八一年六月)

- (17) 注(10)に同じ。

原文：父親……对于日本军队的残暴侵略，对于中国官僚军阀的腐败无能，他憎恨，他愤懑，对于受尽折磨的同胞，他充满了挚爱和同情，但他又看不到出路何在，苦闷彷徨。

- (18) 注(16)に同じ。

- (19) 趙夢雲「中日文化協会」に関する初歩的な考察 上海分会を中心に」
(『植民地文化研究』第四号、二〇〇五年七月)

- (20) 一九四二年六月号の『上海芸術月刊』の「芸術界動態」というコラムにおいて、中日文化協会上海分会の主催した「上海洋画学会」が六月二十一日に設立され、顔文梁、陳抱一、周碧初などが常務理事に選ばれたことが書かれている。

- (21) 趙夢雲「中日文化協会上海分会の「再出発」…機関誌「文協」からその軌跡を辿る」(『中国文化研究』第三〇号、二〇一四年三月)によると、上海分会は期待されていた「日本文化の中国浸透」を達成できず、二年後改組せざるを得ない状況になってしまった。

- (22) 『申報』「中日文化協会上海分会昨舉行改組成立典禮 陳市長林部長均親蒞臨」(一九四三年十月五日)による。

- (23) 『大陸新報』一九四四年十一月二十日刊において、陳抱一は「現在では中日文化協会において日華美術の交流に貢献してゐる」と評されている。

- (24) 理事に選ばれた後の陳抱一は雑誌文章を四篇残している。「關於美術進展的問題」(『文協』、一九四三年十二月)、「弘一法師画像記」(『妙法輪』、一九四三年十二月)、「畫與複製印刷」(『文協』、一九四四年一月)、「美術情況片感—讀須田國太郎氏文後—」(『文友』、一九四四年四月)である。その中で『文協』は上海分会の機関誌である。それぞれの文章の内容は、「關於美術進展の問題」—中国洋画の発展への望み、「弘一法師画像記」—弘一法師の画像創作、「畫與複製印刷」—絵画知識普及、「美術情況片感—讀須田國太郎氏文後—」—中日兩國的美術提携を唱える須田國太郎への皮肉である。

- (25) 陳抱一「美術情況片感—讀須田國太郎氏文後—」(『文友』、一九四四年

四月)の冒頭の部分には、『文友』社の高原氏に要求されたから感想を書かないわけにはいかなかったが、自分が感想を述べたところで何の意味もないという消極的な内容が書かれている。

原文：然而見聞寡陋的我，會有什麼可以說呢。明知隨便說說也是毫無意味的。但對於高原氏一番熱意，我終於推辭不了；於是也只好隨便說說，雖則頭腦很空虛，說起來也只是幾句片斷的空話罷了。

- (26) 注(25)に同じ。

原文：我總覺得我國近代美術之日趨黯淡，是因與歷來時局環境，社會之不安定等等關係；

要是僅如官樣文章式子，提起『美術交流』，則恐怕事實上仍有諸多困難，不容易有良好的成果。

- (27) 『申報』「劉海粟昨宴郭沫若」(一九三七年八月四日)、「茅盾等昨日慰問張伯苓等」(一九三七年八月六日)において、陳抱一は上海の文化人たちとともに「國家救亡」について語り合ったことが報道されている。また、一九三九年に、陳抱一は戦乱のために流浪の身となった人々の姿を描いた、日本軍の残酷な侵略を無声に叱責する、『流浪少年』と『流亡者—一羣』を創作した。そうした情報から、陳抱一は本来抗日側に立っていた知識人だということがわかる。

- (28) 林廣吉は職名こそ中日文化協会上海分会の常務理事兼参与であるが、実は分会の実権を握った人物であることは、大橋毅彦・山崎真紀子・木田隆文・松本陽子・竹松良明・趙夢雲『上海 1944-1945』武田泰淳『上海の螢』注釈(双文社出版、二〇〇八年七月)をはじめとする上海分会に関する先行研究の中で定説となっている。

- (29) 林廣吉「清澄な畫境 陳抱一の個展を觀て」(『大陸新報』一九四四年十一月二十三日)

(30) たとえば『華文大阪毎日』に掲載された「白樺」という人が訳した宮澤賢治詩五章には、誤訳と不自然な訳が数カ所見られ、大胆な削除さえある。ここでは明らかな誤訳のみを取り上げる。

- ① 「鎔岩流」…

原文：一つの蘋果をたべようとす／＼うる／＼しながら赤い蘋果に噛みつけば

訳文：打算吃一個蘋果／捏轉着嚼嚼赤色的蘋果(一つの蘋果をたべる

- ／うろ／ろしながら赤い苹果に噛みつけば)
 ② 「停留所にてスモトンを喫す」…
 原文…わざわざここまで追ひかけて／せつかく君が持つて来てくれた
 ／帆立貝入りのスモトンではあるが
 訳文…雖然是你特謂地追趕來／好心拿給我的／裝置着帆飾的水團（わざわざここまで追ひかけて／せつかく君が持つて来てくれた／帆で飾つたスモトン）ではあるが
- (31) 一九四〇年十二月大陸新報社によって創刊された華字月刊誌で、占領地の中国人を報道写真で宣撫することを目的に発行されていた。(山本武利「解説」(復刻版『大陸画刊』別冊一、二〇一八年七月)による)
- (32) 亀が竜宮の姫様のために猿の生き肝を取りに行く話。訳文の末尾に「豊島與志雄編童話集」とあるのみで、原作は不明。
- (33) 戦後の陳緑妮の活動に関する情報は、劉建輝「日中洋画壇の架け橋…陳抱一」(『アジア遊学』一六八号、(近代中国美術の胎動)、二〇一三年十一月)、陳緑妮「懐念我的父親陳抱一」(陳瑞林編『現代美術家陳抱一』、人民美術出版社、一九八九年九月)を参照したものである。
- (34) 注(10)に同じ。
 原文…由于父亲和母亲的特殊身份,我的家庭既与中国人民一起,又与日本人民一起饱尝了战争的苦难,使我更有切肤之痛。我衷心祈祷:“日中不再战!”“日中两国人民世代友好下去!”
- (35) 注(10)に同じ。
 原文…我愿为日中友好、为日中文化交流尽自己微薄的力量,我要教育我的子子孙孙,永远永远这样做下去,这才是对父亲最好的纪念。
- (36) 林家の人々も日中の友好や文化交流のために尽力したのである。例えば林廣吉は五〇年代に日中貿易促進会の創立に関与し、林得一は八〇年代に日中芸協を設立し、中国の雑技団、京劇団、武術団の来日公演、故宮博物院の美術品の来日展示などを手掛けた。林道紀も父親の設立した日中芸協が大いに活躍している。(伊藤武雄「林廣吉さんを記念する」(『アジア経済旬報』八五六号、一九七二年三月)を参照)
- (37) 陳瑞林編『現代美術家陳抱一』(人民美術出版社、一九八九年九月)に載せられた写真である。
- (38) 一九四四年六月七日成立。

- (39) 武田泰淳「非革命者」(初出は雑誌『文芸』の一九四八年五月号、引用は『武田泰淳全集』第二卷(筑摩書房、一九七一年六月)による)。
- (40) 武田泰淳「女の国籍」(初出は雑誌『小説新潮』の一九五一年十月号、引用は『武田泰淳全集』第一卷、筑摩書房、一九七一年十月)による)。
- (41) 後の周作と關係を結ぶ場面においても、「私はすでに処女でない、女の眼で眺めています」という記述があり、以前陸はすでに男性と關係をもつたことがわかる。
- (42) 武田泰淳『上海の螢』(中央公論社、一九七六年十二月)
- (43) 注(10)に同じ。
 原文…我清楚地记得,在护送他去医院的路上,父亲还挣扎着对母亲说:“不要让燃素跟去了,让她留在家里照顾露露……。”燃素是我的名字,露露是我喂养心爱的一只大狗。
- (44) 注(10)に同じ。
 原文…父亲在生命垂危的时刻,惦记的仍是他疼爱的女儿。他不愿意让我到混乱肮脏的医院里去奔波,他不愿意我和我喜爱的动物分开,希望它在家里陪伴我。

付記

中国語・英語の日本語訳はすべて稿者によるものである。

(ぼ たん、広島大学大学院博士課程後期在学)